

そして、息子をぶどう園の外にほうり出して、殺してしまっ
さて、ぶどう園の主人は農夫たちをどうするだろうか。

（ルカによる福音書 20 章 15 節）

先ほど読まれた福音書ですが、ぶどう園と農夫のたとえと呼
ばれるものです。ぶどう園を作った主人がそれを農夫たちに貸
して、長い旅に出たそうです。いわゆる地主と小作人の関係です。
現代社会においても、この関係はそれほど不思議なものではあ
りません。ぶどう園や農地ではなくても、たとえばテナントビル
を持っているオーナーから場所を借りて、そこで商売をする
ということは普通にあります。

しかし収穫の時期になって、ぶどう園の主人が収穫を受け取
るためにしもべを農夫たちのところに寄こしたところ、事件は
起こりました。農夫たちが収穫を渡すことを拒んだんですね。そ
れどころか、袋叩きにして主人の元に返してしまったそうです。
もしも主人が越後屋のような悪徳商売人で、農夫たちの手元に
何も残らないような形で収穫を寄こすように求めていたのであ
れば、農夫たちの気持ちもわかります。それは怒っても仕方がな
いだろうと。しかしそのようなことは、聖書には何も書かれてい
ません。

みなさんが主人だったらどうするでしょうか。わたしが主人
だったら、ものすごく頭にくると思います。だってそうでしょう。
人の土地を使ってぶどうを収穫していながら、何も渡さないば
かりかしもべを袋叩きにして返すのですから。

ところがこの主人、お人よしというか、人を信用しすぎるとい
うか、続けて 2 人目を農夫たちのところに送ります。しかしそ
のしもべは袋叩きにされ、侮辱され、何も持たされずに帰されま
す。さらに 3 人目を主人は送ります。その 3 人目のしもべもま
た傷を負わされ、放り出されます。

お気づきのように、この主人は、神さまの姿です。旧約聖書に
は、たくさんの預言者が登場しました。しかしその言葉を人々は
無視し、自分勝手に生きていきました。また神さまから与えられ
たたくさんの恵みも、自分だけのものにしてしまい、手放さず
にいました。そのような人間の勝手さに、神さまは辛抱強く、何度
も何度も手を差し伸べてこられました。めん鳥がヒナを羽の下
に集めるように何度も人々を集めようとされ、いちじくが実を
つけるようにその木の周りを掘って肥やしをやり、自分の元か
ら離れ放蕩している息子をじっと待ち続ける。それが神さまの
姿です。

3 人のしもべを受け入れてもらえなかった主人は大きな決断
をします。それは自分の跡取りである息子を農夫たちの元に遣
わすことです。その決断は、神さまがイエス様をわたしたちの元
に遣わしたことと同じです。「この子は跡取りだ。きっと敬って
くれるに違いない」、その思いで主人は、そして神さまは、愛す
るわが子を遣わしたのです。結果はどうだったのでしょうか。ぶど
う園の主人の息子は、農夫たちに殺されてしまいました。そして
イエス様は、逮捕され、十字架につけられ、殺されてしまいました。
この話を聞かされた律法学者たちや祭司長たちは、これは自
分たちに当てつけて語られたものだ気づきました。

ではわたしたちは、この物語をどう聞くのでしょうか。この場には民衆もいました。彼らは思ったでしょう。イエス様は自分たちではなく宗教指導者を批判したのだと。

だから自分たちとは関係がない。そう民衆は考えました。しかしこのイエス様のたとえからわずか数日後に、民衆はこう叫んだのです。「イエスを十字架につけろ」と。「そいつを殺せ、殺してしまえ」と、大声で叫び続けたのです。

わたしたちが今日の福音書を読むとき、民衆と同じように「そんなことがあってはなりません」とつぶやくかもしれません。その反応は当たり前のことでしょう。でもそこで止まってはいけないのです。自分はどうか。自分は一体どのような労働者なのか。

神さまからいただいた恵みの中であげた収穫を、わたしたちはどうしているのだろうか。自分のふところの中に入れてしまい、隠してしまっていないだろうか。その収穫を必要としている人を追い出してはいないだろうか。

念のために言っておきますが、この「収穫」というのはお金のことだけではありません。神さまがわたしたちに与えられたものはたくさんあります。それらを用いて、必要な務めや働きをなしているのだろうか。その思いをわたしたちは持たなければならないと思います。

こういう話をしたときに、こんな風に怒られた方がおられました。「わたしたちは精一杯やっています。ちゃんと神さまに十分返しています。そういう指摘をされるなんて、心外です」と。

「そうですか、素晴らしいですね」。わたしは思います。だってそうでしょう。自分の力できちんとできて、自分の力で神さまの前に正しい者となれるんですから。うらやましい限りです。けれども、わたしはそうはなれません。

聖書に出てくるファリサイ派や律法学者たちも、同じように考えていました。「自分たちの力だけで大丈夫」なのだ。神さまから与えられた律法を守り、罪人と距離を置くことで自分を清く保ち、神さまの代わりに人を裁いていく。

彼らには、イエス様は必要なかったのです。自分の力で神さまの元に行けると信じていたから。しかし神さまの目には、その姿は傲慢で、自分勝手に、罪深いものでした。わたしたちはどうでしょうか。この畑は自分が頑張って耕し、このぶどうは自分が汗水流して作ったものだ。だからすべてはわたしのものだというのでしょうか。

それとも、わたしのこの小さな働きを、どうぞ用いてください。すべてのものは主の賜物、わたしたちは主から受けて主にささげたのですと、両手を広げ、すべてをお委ねすることができるのでしょうか。

イエス様は間もなく、十字架につけられます。それは紛れもなく、わたしたち一人ひとりが生きる者とされるためです。そのイエス様を受け入れ、共に収穫の喜びを分かち合うことができたらと、心から思います。